

ディスコグラフィー掲載

ディスコグラフィー【2020No.166】(HP 掲載)

分類：LP

作曲家：アントン・ブルックナー

曲：交響曲第7番

演奏：ベルナルド・ハイティンク指揮ベルリンフィル

発売：BERLINER PHILHARMONIKER RECORDINGS

No.：KKC-1167/8

概要：



【収録曲目】

ブルックナー:交響曲第7番

LP1

A面 第1楽章:アレグロ・モデラート(22'10)

B面 第2楽章:アダージョ(22'06)

LP2

A面 第3楽章:スケルツォ(11'06) 第4楽章:フィナーレ(13'41)

B面 ハイティンクとベルリンフィル団員によるサイン

【録音】

2019年5月11日、ベルリンフィル(ライブ)



ネット上で得られたその他の情報は下記のとおりです。

ハイティンク & ベルリンフィル最後の演奏会〜が、ダイレクトカット LP で登場！

https://tower.jp/article/feature_item/2020/04/28/1111

ベルリンフィルレコーディングスのダイレクトカット LP 第 2 弾！

ハイティンクのベルリンフィルでの最後の演奏会が登場！

2019 年 5 月に行われたベルナルド・ハイティンクのベルリンフィルにおける最後の演奏会、ブルックナー「交響曲第 7 番」がダイレクトカット LP で発売されます。



即完売した 2016 年発売のラトル指揮「ブラームス交響曲全集」に続くベルリンフィルレコーディングスのダイレクトカット LP 第 2 弾。ワンポイント録音だったブラームスに対し、今回はメインマイク 3 本とサブマイク 2 本の 5 本構成され、コンサート空間の雰囲気を実に再現したマイクセッティング。ディスクの最終面(LP2 - B 面)には、ハイティンクとベルリンフィル団員のサインが刻み込まれています。



そして製造数は、作品の初演年にちなみ、1884セットの限定盤です。
2019年3月、90歳を祝ったハイティンクは、同年6月に現役引退を表明。ブルックナー解釈の第一人者として知られるハイティンクは、その後、ウィーンフィルとザルツブルク音楽祭、ロンドンのプロムス、そして最後にルツェルン音楽祭で本盤と同じくブルックナーの交響曲第7番を演奏しました。ブルックナーの第7番も、ハイティンクにとってコンサート、録音と何度となく取り上げてきた作品です。ハイティンクの第7番の録音はコンセルトヘボウ管(1966年、72年、78年)、シカゴ交響楽団(2007年)の4種類あります。このベルリンフィルとの演奏も、切々とした美しさにあふれ、中でもブルックナーがワーグナーの訃報を受ける中で書き上げたと言われる第2楽章は、万感の思いが込められた演奏になっています。

【封入特典】

- 1.コンサート・チケット&コンサート・プログラム(当日分再現)
- 2.ハイティンクの手書きコメントの入ったスコアの抜粋(リプリント)
- 3.レコーディング・プロデューサーのライナー・マイヤール氏の証明サイン
- 4.コンサート録音時の生写真(1枚)



【仕様】

180g 重量盤 LP レコード 2 枚組

カッティング：マシン：ノイマン VMS80

プロデュース：エミール・ベルリナー・スタジオ

AA アナログ録音・アナログマスター

世界 1884 セット限定製造/シリアルナンバー入り

輸入盤・日本語帯・解説付

YouTube によるトレーラーを下記サイトからみることができます。

https://tower.jp/article/feature_item/2020/04/28/1111



今回購入した盤のシリアルナンバーは、656/1884 です。

添付された録音時の生写真によれば、カッティングルームはステージの全景を見下ろすところの位置しており、演奏を見ながらカッティングできるようになっているようです。

針を下して聴きだしてすぐ分かることは、静寂感が顕著で、アナログ特有のノイズ感が極小になっていることです。

高弦は瑞々しく、低弦はゆったりと響きます。総奏では、ブルックらしい厚みと深みが、滲みなく聴こえてきます。そして、アナログ特有の個性が消えて、あくまで自然に聴こえ、そのことが、この曲の抒情性を引き立てています。

一言で言えば、アナログマスターからの盤でもなく、デジタルマスターからの盤でもなく、極めて有機的な生演奏に近い音質です。

ブルックナー解釈の第一人者として知られるハイティンクが、ベルリンフィル以外に、ウィーンフィルとザルツブルク音楽祭、ロンドンのプロムス、そしてルツェルン音楽祭で、この曲を演奏したとのことで、引退を飾る花道として、ブルックナーの7番を選び、集大成の意味でこのダイレクトカッティング盤で残してくれたということ

になります。演奏としては、おそらく古今のブルックナーの演奏中の中でも、名演といっても過言ではなく、スケールの大きなこの曲の魅力を表現してくれています。

以上